いつも喜んでいなさい　　ピリピ 2:12-18

大阪のある小学校で子供たちにこんな問題が出されたそうです。「ここに１０個のりんごがあります。そばにいた３人のこどもがりんごを食べました。りんごはいくつのこっているでしょうか？」こういう問題です。子どもたちの答えは＜こどもやったら一人一個食べたらおなか一杯やから３個食べて残りは７個や＞＜いやいや、小さなりんごやったら２個ぐらいいけるから３人で６個食べて残りは４個や＞＜それみんなただやったら何個食べても残りは家に持って帰るから残りは０個や＞・・とまあいろいろあーやこーやと意見が出て、その場はパニック状態になったそうです。すると後ろの席にいた背のスラっとした男の子が立ち上がって（大体こういう時に賢い子が出てきますが）こう言ったそうです。「先生、これは問題が間違ってます。これだけやったら答えは出てきません」と。つまり、問題には条件が不足している、欠けがあると指摘したわけです。問題自体がバツ X、関西ではペケだということです。しかし、先生は生徒達にこう言ったそうです。「確かに（一人二個づつ食べました）とか条件を加えんかったら正しい答えは出てきやへんなー。せやけどそうかとゆーて答えが出やへんわけちゃうで。さっきみんながあーやこーやと言うてたんは全部答えとちゃうか。そー考えたら答えなんてなんぼでも出てくるんとちゃうか。つまりたくさんの答えが出てきたんは問題に欠けや不足があったからとも言えるんちゃうか。」

とまあこんなやりとりがあったそうで。そんな話のやりとりの様子を思い浮かべながら私たちも自分の人生を考える時によく失敗したことや足りなかったことを思ってはそれがあったからうまく行かなかったと思ってしまうことがありますが実はそれがあったからこそ、人生について学び、新しい生き方へと歩み出せたとも言えるのではないでしょうか？　それは過去のことに限りません。これからの人生においてもうまくことが進まない、そして行き止まりのように見えて、実はそれが新しいことの始まりとなるということです。そのようなことを今日は聖書に出てくるパウロの生き方から学びたいと思います。

そのことで今日は聖書のピリピ人への手紙を取り上げたいと思います。この手紙は、パウロが獄に入れられている時に書かれましたので「獄中書簡」と呼ばれます。またこの手紙の中に「喜び」または「喜ぶ」ということばが繰返し出てくることから別名「喜びの書簡」とも呼ばれます。それでは、この手紙を書いた時、パウロには、よほど喜ぶべきうれしいことがあったのでしょうか。いいえ、彼は普通の人なら決して喜べないような状況の中にありました。むしろ人生のどん底、行き詰まりとも思える中にいたのです。クリスチャンになり、イエス・キリストを宣べ伝え、数々の教会を建てあげてきた彼は、同じユダヤ人から妬まれ、危険人物としてローマ皇帝に訴えられ、囚人船に乗せられ、今ローマの牢獄に閉じ込められているのです。しかも 17 節の「注ぎの供え物となっても」というのははっきりと血が流される、つまり処刑される可能性が高いということです。しかし、パウロはとても喜べないような状況の中にありながら、「わたしは喜ぶ」そして「あなたがたも喜びなさい」とまで言っています。なぜ、彼はそんなに喜んでいることができたのでしょう。それは彼の心の中に喜びの源があったからです。ローマの権力はパウロの自由を奪ったかもしれませんが、彼の心の中にある喜びは奪うことはできませんでした。パウロの肉体を鎖につなぐことはできても、そのあふれる喜びを押しとどめることはできなかったのです。

私たちは、そのような喜びを持っているでしょうか。もし、私たちの喜びが環境や状況、あるいは人の言葉や態度に頼って成り立っているとしたら、私たちは、毎日毎日心のアップダウンを経験しなければなりません。もしかしたら一時間ごとに、喜んだかと思えば怒り、怒ったかと思えば泣き、泣いたかと思えば笑うという不安定な日々を送ることになるかも知れません。それをそのまま表面に表わしたら、おかしな人と思われてしまいます。では、どうしたら、パウロのように私たちは毎日心の中に、深く静かな、

消えることのない喜びを持つことができるでしょうか。

その第一は、自分の価値を知ることです。心理学者たちは、喜びを失った人々を観察し、調査して、その多くは、自分の価値を認められない人たちだと言っています。そもそも私たちが劣っているとか優れていると何故思うのかと言うなら、心の中にいつのまにか住みついた理想の自分の姿が影響しているからです。理想の自分と比べて持つ感覚をセルフイメージ、セルフエスティームと言います。いつも落ち込んだり、自分に腹を立てたりする人はセルフイメージの低い人と言われます。知的にも、身体的にも、環境的にもずいぶん恵まれているのに、いつも人とくらべて「自分は劣っている」とか「自分は優れている」とか考えている人は、決して喜びを持つことができません。神はあなたに「わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している」（イザヤ 43:4）と語りかけておられます。どの人も神の目には価値のある尊い存在です。人と比べなくても「自分には価値がある。」このことが分かれば、私たちは神が私をこんなにも素晴らしく造ってくださったということに感謝し、それを喜ぶことができるのです。

神の御子イエス・キリストが十字架の上で死んでくださったのは、私たちが、神の御子のいのちと同じほどの価値があるということです。神は無意味なことはなさいません。キリストが、私のために命を投げ出してくださったということは、言いかえれば、私が、神の目には、キリストのいのちと引き換えにしても良いというほどの価値があるということなのです。そして、私にそれだけの価値があるのなら、あなたの隣に座っているあなたの兄弟姉妹も同じように貴い存在だということです。このイエス・キリストの愛を受け入れる時、私たちの心の中に、どんな時も変わらない喜びが湧きあがるようになるのです。

次に、自分の人生の目的をはっきりと知っている人は、そのことによって喜びを持つことができます。人が見ればうらやむような良い仕事を持っているのに、その仕事が楽しくなくて、いつも不満ばかり言っている人がいたとしたら、その人は、おそらく、自分が何のためにその仕事をしているのか、自分の仕事の目的をつかんでいないからでしょう。何のためにこのことをしているのか分からないほど苦しいことはありません。人間は目的のないこと、意味のないことの繰り返しには耐えられません。

スポーツ選手が、苦しい練習を耐えることができるのは、競技に出て賞を得るのだというはっきりとした目的を持っているからです。ゴールが明確だからです。しかし、私たちの人生にはかならずしも、目的や目標の見えてこないものが多くあります。毎日子供の世話で追われ、忙しくしている主婦にとって、自分の人生の目的はこれなのだと確信するのは難しい場合があります。会社にいて目の前の仕事をこなしたり、人間関係に気づかいながら仕事を管理する中でも難しいでしょう。３年以内の離職率が３割を超え、終身雇用は有名無実化している現代日本社会にあってこの仕事、この会社のために私は生まれてきたと言える人はほとんどいないと思います。また世の中にはいろいろな習い事をしたり、趣味を楽しんだりするものがたくさんありますがそれをすることが人生の目的になるかと言えばそんなことはありません。多くの趣味や習い事に行く、一番の目的は友達や仲間ができることだそうです。イエス・キリストは言われました。「わたしが来たのは、羊がいのちを得、またそれを豊かに持つためです」（ヨハネ 10:10）聖書が言う「永遠のいのち」とは、天国で永遠に過ごすことができるというだけでなく、この地上の人生を目的をもって、そして喜びをもって送ることができるということでもあるのです。イエス・キリストはあなたはすべて分からないかもしれないけれどもあなたには目的と意味があってこの世に存在し生かされているんだよと言われているのです。イエス・キリストによって魂の中心を、永遠のいのちで満たしていただく、そうしてはじめて、私たちは本当に満ち足りた喜びの生活を送ることができるのです。その神様の声を真剣に受け止めようとせず、世が示す価値観やものさしで自分を責めたり、苦しめたりするな

ら、時には自慢しているならそこからは喜びが起こるはずがありません。

第三に、人生の喜びは、誰かに愛され、誰かを愛することの中にあります。愛のない人には喜びはありません。多くの人は、自分が愛されていないと感じるので、人を愛せない、人を愛せないから人からも愛されないという悪循環の中にいます。この悪循環を断ち切るために、「私は愛されている」ということを、いつもいつも思う必要があります。何故なら、この世は「あなたは本当は愛されていない」ということをいろんな形で示してくるからです。「これが出来ないと愛してもらえないんだ」「実は私はそれほど愛されてはいなかったんだ。」「人に裏切られる経験」等々。何もしなければサンドバックのように打たれたままです。しかし、たとい世界のすべての人があなたに敵対しても、神はあなたの父となり、イエスはあなたの友となってくださるのです。イエスは十字架の上で両手をいっぱいにひろげて、「わたしはあなたをこんなに愛しているよ」と語りかけていてくださるのです。この神の愛を知るとき、私たちは、自分を守ることに精一杯な状態から自然と自分のうちから愛が流れ出るのを体験するのです。誰も声をかけてくれない、誰も私の話しを聞いてくれない、誰も分かってくれないとつぶやいていても解決にはなりません。先ず神が十字架のわざをもって私を愛して下さっていることを覚えましょう。「神はそのひとり子を世に遣わし、その方によって私たちに、いのちを得させてくださいました。ここに、神の愛が私たちに示されたのです。」ヨハネ第一４：9

今朝の聖書の個所、ピリピ 2:16-18 で、パウロは自分の生涯をふりかえって「私は、自分の努力したことがむだではなく、苦労したこともむだでなかったことを、キリストの日に誇ることができます」(16 節) と言っています。パウロは自分が神の目に価値があることを知っていました。自分の生涯がキリストを宣べ伝えるためにあるのだということを知っていました。囚人となって伝道する自由を奪われても、それが彼に与えられた人生の目的を妨げるものでないことを知っていました。神のご計画はかならず実現すると信じていました。そして、パウロは「たとい私が、あなたがたの信仰の供え物と礼拝とともに、注ぎの供え物となっても、私は喜びます。あなたがたすべてとともに喜びます」（17 節）と自らの死を前にしても言いきることができるほど人々を愛することができたのです。

最初にこのピリピ人への手紙には２つの呼び名があると言いました。「獄中書簡」と「喜びの手紙」がそれです。実はこの手紙には第３の呼び名があることをご存知でしょうか？　ピリピ人への手紙の第３の呼び名は「白鳥の歌」と言われています。この手紙の文章が優雅だからでしょうか？　そうではありません。白鳥は生涯を終える時、つまり死の直前に最も美しい声を出して死を迎えるそうです。私はその場面に出会った経験はありませんが。パウロも今、自らの死の予感を近くに感じながら手紙をしたためているのです。そして死を前にした白鳥の最も美しい声のように、最も美しい手紙を書いているのです。その美しい手紙の中で美しいことばは「喜び」ということです。私たちはその立場に立たなければ本当の意味で感じられないことが多くあります。大人になって親のありがたみと苦労が分かります。年を重ねて若い頃の未熟さが分かるということもあります。パウロは今、自らの死を近くに覚えて、この私のために、罪深いこの私のために主イエス・キリストは十字架にかかって死んで下さったのだとキリストの死と神の愛の大きさを深く味わったのです。そしてこのキリストの愛は今も全ての人に注がれています。パウロのようにはいきませんが許されるならばキリストの十字架の贖いに示されるほどまでに神に愛されていることを喜びたい。そしてこの喜びをまだ主を知らない人に届けて共に喜びたい。共に分かち合うために兄弟姉妹がいること、そして神の家族の一員とされていることを共に喜びたいと思うのです。